



協賛機関挨拶

一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構 副所長

岡部 陽二

第19回ファイザーヘルスリサーチフォーラムの協賛研究機関を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

ただ今、島谷理事長からご説明がございましたように、多額の研究助成を通じてこの分野での研究活動を活性化させ、社会に大いに寄与されておりますファイザーヘルスリサーチ振興財団の大きなご貢献に、心から感謝申し上げる次第です。

ヘルスリサーチは、日本でもようやく浸透してまいりましたが、この研究の目的は、島谷理事長からお話がございましたように、一人一人のクオリティ・オブ・ライフの向上を目指して、自然科学と社会科学の成果を有効に取り入れることによって、すべての人が最高の医療を受けられる仕組みをどうすればできるかということを追求することにあると理解しております。このような新しい学際的な研究分野の出現は、診断治療の技術や公衆衛生の向上といった医療提供側からの研究とは別に、医療サービスの受け手側の視点に立って見る研究が重要になってきたことを意味しているものと理解しております。

ところが、ちょっと余談ですが、つい最近も延命治療の是非をテーマにした『終の信託』という映画を観て痛感したのですが、さはさりながら、現実にはますます複雑化する医療行政だとか医療技術の進歩等の要因によって、生物医学的研究の成果と、その結果を患者に還元するための医療の現場での考え方の中に大きなギャップが生じ、それがさらに拡大している傾向があるのではないかという気もいたします。

こうしたギャップを埋めるためにも、医療の受け手側主体の視点からの研究姿勢で取り組むヘルスリサーチという分野の役割が、ますます重要になってくるのではないかと考えます。このような観点から、ヘルスリサーチに絞り込んだ研究助成活動は、数少ない貴重な存在です。海外に比べても遅れている学際分野の研究をわが国で定着させるべきであるとの当財団の先見性のあるご発想に、改めて心から敬意を表する次第です。

今年のフォーラムは「社会をつなぐヘルスリサーチ」ということになっておりますが、本日のたくさんの研究発表の演題を拝見しましても、多面的な角度からの国際比較、地域との関わりや小学校教育での啓発といった、新しい観点から取り上げた幅広い研究テーマが目白押しで、まさにヘルスリサーチの研究が一段と定着したということを実感しております。

皆様方もご存知の通り、ファイザー社は大変厳しい経営環境の下にありながらも、リストラを進める一方で、エスタブリッシュ医薬部門といった新しい分野への進出とか、大変

活発な M&A の戦略で高い収益率を維持しておられます。日本法人のファイザー株式会社の売上高は、昨年は 5,592 億円と、前年比で 2 割増という大きな伸びでした。IMS の集計で販促ベース売上高（これが一番実態に近い売上高のようです）によりますと、すでに武田薬品を抜いて国内最大規模の製薬会社になったと報じられております。

さらに今年の 8 月には、米国の後発品市場で最大規模のマイラン製薬と日本での後発品事業を戦略的に提携することを発表され、長期的に日本市場を俯瞰した日本へのコミットメントを一段と強められたものと評価されております。

ところで話は変わりますが、協賛させていただいております医療経済研究機構におきましても、医療経済学会との共同編集で『医療経済研究』という、年に 3、4 回発行する学会誌を発行しております。年内には、去年始めた英語版の第 2 号を e-publication で発刊する予定です。

ファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成におかれても、高い研究の質を担保するという観点から、研究成果は学術誌等の専門誌に投稿することが義務づけられておりますので、研究成果を『医療経済研究』誌に投稿するということが、是非この雑誌を活用いただきたく、積極的なご投稿をお待ちしております。

また、医療経済研究機構でも、ファイザーヘルスリサーチ振興財団の 10 分の 1 ぐらいの規模ではありますが、毎年、医療経済分野の若手研究者に研究助成を行っておりますので、この助成への応募もご検討いただければありがたいです。

冒頭に申し上げたように、研究体制が立ち遅れておりましたこの分野での研究振興に、つとに着目されたファイザーヘルスリサーチ振興財団の先見性に改めて敬意を表し、このフォーラムがますます充実した存在感のある研究発表、また研究交流の場として力強く発展されることを期待して、私の挨拶といたします。